

103

肺癌切除例における肺内転移について

癌研外科：○松原敏樹、中川 健、木下 巖

癌研内科：古川一介

癌研病理：土屋永寿、脇本讓二

1980年12月迄われわれの施設で行った肺癌に対する肺切除350例を対象として、肺内転移について検索した。

350例中肺内転移は16例にみられその頻度は4.6%であった。

肺内転移を主病巣と同じ肺葉内にあるものを同一肺葉群、他の肺葉に迄及ぶものを他肺葉群に分けてみると、同一肺葉群10例、他肺葉群6例であった。

肺内転移個数を1ケの場合と2ケ以上に分けてみると、同一肺葉群では1ケが4例、2ケ以上が6例、他肺葉群では1ケが4例、2ケ以上が2例となっている。

組織型別にみると肺内転移16例中腺癌10例、扁平上皮癌3例、小細胞癌2例、大細胞癌1例となり肺切除例に対する比率では腺癌 $10/156=6.4\%$ 、小細胞癌 $2/40=5.0\%$ 、大細胞癌 $1/21=3.5\%$ 、扁平上皮癌 $3/112=2.7\%$ となり腺癌の発生頻度が高かった。

肺葉別にみると、腺癌10例中同一肺葉5例、他肺葉5例と半数が他肺葉に及んでいるが扁平上皮癌3例、小細胞癌2例では何れも同一肺葉にのみ転移をみとめた。

肺内転移とリンパ節転移の関連では16例中5例がリンパ節転移をみとめず、2例が肺内リンパ節、9例が肺門、縦隔のリンパ節に転移をみとめた。肺葉別では、他肺葉群の方が同一肺葉群に比べリンパ節転移陽性の頻度が高い。

手術の術式とくに手術時に明らかに癌遺残をみとめるものと、みとめないものに分けてみると、同一肺葉群では10例中9例が癌遺残がなく比較的良好な手術が出来たのに反し、他肺葉群では6例中1例のみが癌遺残がなく残り5例は何れも癌遺残をみとめた。

肺切除後の予後を見ると、他肺葉群では半数が1年内に残る半数が2年以内に死亡している。それに反し同一肺葉群では半数が1年以内に死亡しているが、残りの半数の中には5年弱健生存中のものを含め3例が生存、2例が死亡している。この死亡例のうちの1例は術後2年半呼吸不全にて死亡、剖検したが癌は全くみとめなかった。

まとめ：自験例を対象として肺内転移について検索した。肺内転移は腺癌に多くみられ、同一肺葉のみならず他肺葉に迄及ぶものもある。予後を見ると、同一肺葉で扁平上皮癌の場合に良い傾向を示した。

104

教室で経験した肺胞上皮癌切除例17例の臨床的検討

長崎大学第1外科

川原克信、中村 讓、綾部公懿、内山貴堯

大曲武征、南 寛行、江口正明、石橋経久

高田俊夫、田川 泰、高木敏彦、三浦敏夫

昭和30年6月より昭和56年6月までの過去26年間に教室で経験した肺胞上皮癌は17例で、同期間における組織型の明らかな原発性肺癌338例中5.0%であつた。性別は男性9例、女性8例、年齢は46才から73才までで、40才台4例、50才台および60才台が各々6例、70才台1例である。症状は咳嗽喀痰8例、咳嗽のみ2例、血痰1例で自覚症状なく胸部異常影を指摘されたもの7例であつた。入院時の胸部レ線所見を結節型および浸潤型に分類すると、結節型11例、浸潤型6例で、病変部位は右肺が11例、左肺5例、両側肺1例であつた。

術前、癌と確診された症例は12例で、喀痰細胞診陽性4例（結節型1、浸潤型3）、擦過細胞診陽性5例（結節型4、浸潤型1）で、細胞診陽性率は59.6%である。細胞診陰性8例のうち4例は経気管支肺生検および経皮的肺生検で確診を得たが、残る4例は術中迅速標本の検索によらねばならなかつた。

手術は全例に肺葉切除を行なつた。浸潤型は胸廓内隣接臓器への浸潤、肺門および縦隔リンパ節転移をみる場合が多く、6例中3例に壁側胸膜、1例に心膜浸潤を認め、それぞれ合併切除を行なつた。また浸潤型6例中3例に肺門、縦隔リンパ節転移がみられ、うち1例は転移リンパ節の気管支壁浸潤に対し、気管支形成術を併用した。治療手術を行い得たのは浸潤型6例中1例のみで準治療手術4例、非治療手術1例（対側肺転移）であつた。結節型11例のうち1例にのみ肺門、縦隔リンパ節転移、壁側胸膜浸潤、肺内転移がみられ残る10例はリンパ節転移、胸廓内隣接臓器への浸潤はなく、治療手術を行ない得た。

摘出標本の肉眼所見は、結節型では正常肺との境界は比較的明瞭であるが、浸潤型では不明瞭で大葉性肺炎のgray Hepatizationを思わせるびまん性浸潤を2例に認めた。組織学的には結節型、浸潤型ともに肺胞構造は良く保たれ、立方ないし円柱状細胞が一層または二層に配列し、17例中10例に癌細胞内のムチン様粘液物質の産生がみとめられた。

結節型の予後は肝硬変による他病死1例を除くと、10例中4例が5年以上生存中（6年～12年1ヶ月）であり、死亡例は2例のみで術後9ヶ月、2年4ヶ月肺、頭蓋骨および脳転移で死亡した。一方浸潤型の予後は結節型に比べて不良で3年以上生存例はなく、6例中4例が4ヶ月ないし、2年で胸膜、肺、肝転移により死亡した。以上教室で経験した肺胞上皮癌切除例17例について臨床的に検討し報告する。